

2016年4月10日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 19章 1～10節

説教：王を連れ戻さなければならぬ

あらすじ

ダビデの息子アブシャロムは父に逆らい、自分こそイスラエルの王であると勝手に宣言し、父を殺そうと企めます。父ダビデは、息子と戦うこと避けようと努力してきのですが、とうとう戦いを交える日がやってきます。その戦いに出て行くとき、ダビデは民たちに向かってこう言いました。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」彼を捕まえても殺さないで欲しいということです。しかしダビデの願いもむなしく、アブシャロムは戦場でいのちを落としてしまいます。そのことを聞いたとき、ダビデは体を震わせ、「私が代わって死ねばよかったのに」と叫びながら、大泣きに泣いた。それが前回までのあらすじでした。

1 ダビデ

1) アブシャロムの死を嘆く

戦いはダビデの側の勝利ということで決着がつけました。普通であればここで人々は喜び勇みながら故郷に凱旋し、盛大にお祝いをするはずでした。ところが、今回はそのようにはいきません。民たちは、「ダビデがアブシャロムのために喪に服したままである」と聞きました。王さまが息子の葬儀をしているときに、国民がお祝いをする訳にはいきません。それで3節にあるとおりに、人々はこっそりと隠れるようにして自分の家に戻っていかなければなりませんでした。

2) 民たちの心が離れていく

ここで問題が起きます。ダビデが息子の死を悲しむことは親として当然であったと言いうことはできるでしょう。しかし、それがいつまでも続いていったらどうなるか。実際ダビデは喪服で顔をおおい、大声で、「わが子アブシャロム。アブシャロムよ。わが子よ。わが子よ。」とずっと叫び続けていました。そうしたら、人々の心の中に疑問が湧いてきませんか。自分たちは王さまの命令に従い、一生懸命戦場で戦ったのです。その結果、戦いに勝ち、王さまの願っていたことが実現した訳です。当然、人々は王さまからのねぎらいの言葉を期待するでしょう。「よくやった。良いしもべだ。」ところが、今はどうなのか。まるで、自分たちがアブシャロムを殺したことが悪かったかのような、王さまの態度なのです。一生懸命働いたのに、そんな評価をされたのならたまりません。もうダビデのことを信頼できない。そう人々は思い始めています。このまま何もしないでいれば、ダビデは王の地位を失い、イスラエルは分裂してしまうでしょう。

3) ヨアブのアドバイス

この問題にいち早く気がついたのは、ダビデの軍隊を指揮していたヨアブでした。ヨアブはダビデの側近の中で唯一、上司であるダビデにずけずけとものを言えた人のようです。極めつけは6節の最後でしょう。「もしアブシャロムが生き、われわれがみな、きょう死んだのなら、あなたの目になつたのでしょうか。」言うまでもなくダビデに対する強

烈な皮肉です。そしてこう言います。7 節。
「それで今、立って外に行き、あなたの家来たちに、ねんごろに語ってください。私は主によって誓います。あなたが外においでにならなければ、今夜、だれひとり貴方のそばに、とどまらないでしょう。そうなれば、そのわざわいは、あなたの幼いころから今に至るまでにあなたに降りかかった、どんなわざわいよりもひどいでしょう。」

もしいまダビデが息子の死を悲しむのを止めないで、部屋に閉じこもったままにいるなら、人々は王さまを見限ってあなたを捨ててしまう。そうなれば、ダビデだけではなくて、この国全体が大変なことになるだろうと言っています。

4) 門のところに座る

ダビデはヨアブのアドバイスに従い、喪服を脱ぎ、部屋を出て、門の所に座ります。ただ座ったのではなく、戦いで大きな働きをした者に声をかけ、ねぎらったということでしょう。あるいは、戦いに勝ったことを一緒にお祝いしたということでしょう。これでやっと、人々の心に重くつかかえていたものが取り去られました。人々は、元のようにダビデに心を寄せはじめていきます。めでたしめでたし、です。

でもダビデはどうだったのでしょうか。ヨアブに厳しいことを言われて、「はいそうですか」と、すぐに心を切り替えることができたのでしょうか。とてもそんなことができたとは思えません。心の中は悲しみで一杯だったはずですが、それでも、ダビデはそんなことは押し隠して、とにかく戦争に勝ったことを人々と一緒にお祝いをしました。

「政治家や会社の社長のように高い地位に

ある者は、公の前に出たら涙を流してはいけません。」そのような不文律がこの社会にはあるように思います。もし涙を見せようものなら「女々しい奴だ」とか、「公私混同している」と言われて非難されかねません。ダビデも言ってみればそんな厳しい視線にさらされていました。

2 民

1) 悲しみを隠した：すべての民は、王の前にやってきた

さて、ここで考えたいと思います。この箇所は何を伝えたいのでしょうか。国の王たる者はたとえ息子が死んでも悲しんではならない。そういう教訓なのか。ここには、ダビデが活躍して大きな成果を上げましたという話は一つもない。むしろ、ダビデはただ泣いているだけです。どこに恵みがあるのでしょうか。よく見ると、ここにも大きな恵みが浮かび上がります。

二つあります。一つ目は、8 節の真ん中のところにあります。「すべての民は、王の前にやってきた。」離れかけていた人々の心が、再び王と結び合わされていきました。それはダビデが何をしたからか。いま言ったばかりです。ダビデが喪服を脱ぎ、人々の前に出たから。王であるダビデが、悲しみを押し隠したことによって和解がもたらされた。これが一つ目です。

2) 息子の死を悲しんだ：王を連れ戻さなければならぬ

では二つ目。今イスラエルの国は二つに分かれています。簡単に言えば、ダビデにつく人々と、アブシャロムの側につく人々。この二つの勢力が戦った結果、ダビデの側が勝ち

ました。でも課題が残っています。アブシャロムについていた人々は、言ってみればイスラエルの王であるダビデに拳を振り上げたこととなります。それが自分たちは負けてしまったのですから、普通どうなりますか。王に逆らった者は徹底的に弾圧されるでしょう。そうなれば、イスラエルは一つとなることは出来ません。

でも、今日の箇所には何と書いているか。10節。「われわれが油を注いで王としたアブシャロムは、戦いで死んでしまった。それなのに、あなたがたは今、王を連れ戻すために、なぜ何もしていないのか。」

ダビデ王に拳を振り上げ、背いていた人たちが、もう一度ダビデの側につかなければならぬ。そのためには王をエルサレムに連れ戻す必要がある、と考えています。なぜこんなことを考えるのでしょうか。アブシャロムが駄目だったから、元の王さまに首をすげ替える、という単純な話ではないでしょう。普通なら、こんなときいろいろな感情が湧いてきます。ダビデを赦したくないという怒りの感情もあれば、反対にダビデをエルサレムに戻すべきだろうけれど、ダビデは赦してくれるのだろうか。そういう不安。たいていの場合、そんな感情がじゃまをして物事は簡単に前に進まないものです。反対する者、揚げ足をとる者、いろいろな意見が出て混乱します。ところがここでは、ダビデを戻さなければならぬと意見がまとまっていく。それはなぜなのでしょうか。

理由があります。ダビデがもしアブシャロムの死を悲しまなかったならどうなっていたか。もしそうであったら、ダビデはアブシャロムについていた者にこんなシグナルを送ったことになる。「私は、たとえ肉親のア

ブシャロムでも赦しはしない。まして、アブシャロムについていた者はなおさら厳しい処罰を与える。」こんなシグナルを送られたのであれば、どこにも和解の糸口はありません。イスラエルは分裂していきます。

でもそうではなかった。民たちが不安になってしまうほど、ダビデはアブシャロムの死を悲しんだ。それはアブシャロムについていた人々にこんなシグナルを送ったことになる。

「父に背いたアブシャロムでさえ、私はその死を悲しむ。であれば、どうしてアブシャロムについていた者の罪をさばくことがあるのか。いや私は絶対にさばかない。」

ダビデは男泣きに泣きながら息子の死を悲しみました。人の目には、力もなにもないただの女々しい男にしか見えません。ところが、王が弱い姿を見せたことによって、実は人々を和解させる糸口を用意することになった。もちろんダビデがそこまで考えてやった訳ではないでしょう。でも結果としてそうなっていったのです。

3 神

神のなさることはいつも不思議です。ダビデのことから、神ご自身のことを教えられます。主は私たちの罪を一身に背負われたとき、父に背く者となりました。背いた者は例え自分の息子であつてもさばかれなければなりません。それが十字架でした。ひとり子イエス・キリストを十字架でさばいたとき、父なる神はどんな気持ちであつたのか、聖書にはひとことも記されていません。ダビデのように、悲しみを押し隠していたということばがぴったりです。それがもし、父なる神は大泣きに泣いて悲しんだと書いてあつたならどうなりますか。私たちは、そこまで神を苦し

めたという恥に襲われてしまい、もう神の前に出られなくなるでしょう。神が悲しみを隠してくださったから、今私たちは十字架のところに來ることができる。そのことを覚えます。

また、もしあるとき父なる神が、冷たい心でひとり子をさばいていたのならどうだったのでしょうか。息子でさえそのような扱いをされるのであるなら、罪ある人間が赦されることなどありえない。そういうことになります。

しかし私たちはダビデのことから教えられます。ダビデは、父に背いたアブシャロムさえをも惜しみ、その死を悲しんだ。人々が不安になるほど悲しみました。

だったら父なる神はどうなのでしょう。私たちの罪を背負い、父に背く者の姿となられた主イエス・キリスト。父なる神はその死を、ダビデ以上に悲しんでおられた。であればなおさらのこと、私たちの罪が神の前にもう一度問われることは絶対にない。神に逆らった者であっても、その罪を告白する者に、神は涙を流しながら、よく戻って来てくれたと言って喜んでくれる。

神はそのような方なのです。御名をあがめたいと思います。